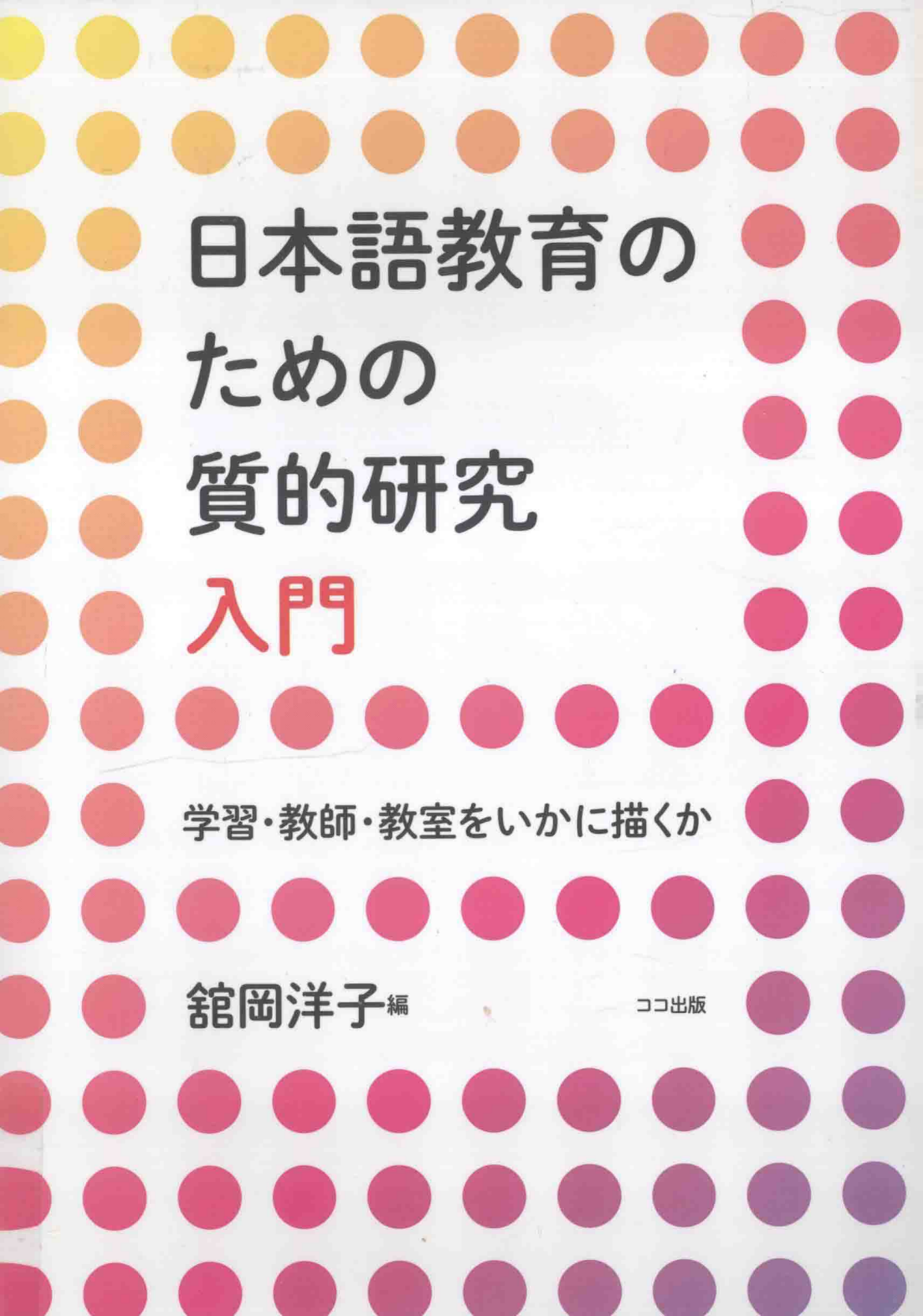


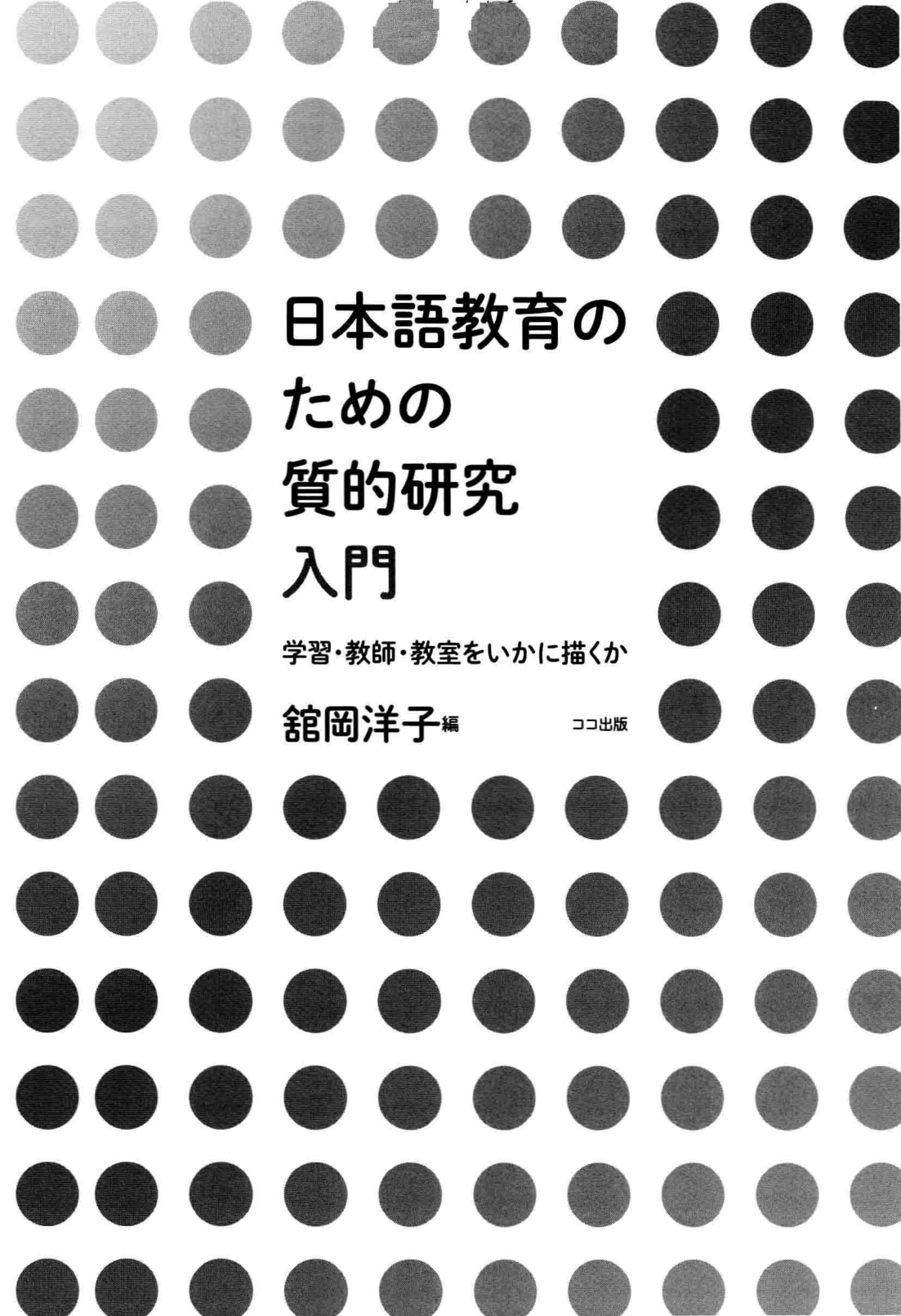


日本語教育の ための 質的研究 入門

学習・教師・教室をいかに描くか

舘岡洋子^編

ココ出版



日本語教育の ための 質的研究 入門

学習・教師・教室をいかに描くか

館岡洋子^編

ココ出版

日本語教育のための質的研究 入門

学習・教師・教室をいかに描くか

2015年10月10日 初版第1刷発行

編者 ————— 館岡洋子

発行者 ————— 吉峰晃一郎・田中哲哉

発行所 ————— 株式会社ココ出版

〒162-0828 東京都新宿区袋町25-30-107

電話 03-3269-5438 ファクス 03-3269-5438

装丁・組版設計 ——— 長田年伸

印刷・製本 ————— 株式会社シナノパブリッシングプレス

定価はカバーに表示してあります

ISBN978-4-904595-68-8

© Yoko Tateoka 2015

Printed in Japan

はじめに

近年、日本語教育においても質的な研究が増えてきました。これは、日本語教育が対象とするフィールドが今まで以上に多様かつ複雑になってきていて、カテゴリー化したり一括して把握したりできない状況になっていることと大きく関係していると思います。また、日本語教育の実践や研究をする人々の学習観、教育観、そして研究観が変わってきたということもいえるでしょう。

社会学や人類学、心理学、教育学などにおける近年の質的研究ブームは、90年代終わりから2000年ごろにかけて大きくなり、現在、質的研究の本はそれこそ山のように出版されています。そんな中での今回の企画は、いまさらの感も否めないかもしれません。しかし、私にとってずっとひっかかっていたのは、日本語教育のフィールドから立ち上がった疑問や課題を解決するのにふさわしい研究とは、そして、その方法とは、どのようなものかということでした。

私たちは、自らが取り組む実践のフィールドで、よりよくフィールドを理解し、そこからフィールドの変革につなげていくことをめざして、「実践研究」を行っているのではないかと思います。多様で雑多で複雑かつ動的なフィールドをどのようにとらえ、描くことができるのか、その模索から質的研究が求められているのでしょうか。しかし、方法の模索とは、実は、現実の切り取り方、実践の捉え方、

自分自身の考える日本語教育とは何かという考え方自体を追究し続けることでもあると思います。つまり、質的研究を行うということは、フィールドのデータをある決まった手順にしたがって処理していくといった「やり方」だけを指しているのではないということです。何をめざして何のために研究をするのか、自らがフィールドをどう捉えるのか、見たいものは何かという問いに対して、自分自身が工夫して「方法」を生み出していくものではないかと思います。たとえば、日本語能力をどのようにとらえるのか、それを教室ではどのように育成できると考えるのか、それによって、教室にいる学習者たちにテストを実施したり、アンケートを実施したり、また、学習活動を観察したりとその研究方法は変わってくるでしょう。もちろんその過程で先人たちが行った工夫の数々が大変参考になることはいうまでもありません。自分のフィールドをどう理解し、そこで生まれた問いにどう答えをだしていき、それをフィールドにどう戻していくのかというそのプロセス全体が、研究だと私自身は考えています。

そこで、日本語教育のフィールドから立ち上がった日本語教育ならではの課題について、それぞれが何を見ようとしてどんな工夫をしたのか、そのプロセス全体を互いに開示し、学び合える場が必要ではないかと考えました。研究のプロセス自体を議論する場合は、まだ多くはありません。日本語教育における質的研究における可能性と課題を議論し学び合えるような場づくりをしたいというのが本書を企画した動機です。

したがって、本書がめざしているのは、執筆者たちがそれぞれのフィールドで取り組んだ実践研究のプロセスをそのまま描くことです。そのプロセスで、執筆者たちは自分の見たいものは何だったか自問し、同時に方法を工夫して

います。ここでは問いと答え、その両者をつなぐ方法はある程度、同時的なものなのです。そこが仮説を立ててデータを取り、検証していくタイプの研究とは大きく異なっている点でしょう。執筆者たちの中には、その試行錯誤のプロセスを自身が執筆した論文の変遷を通して語ってくれているものもあります。最初の論文執筆時とは問題意識自体が変化し、それに伴って方法が変わったという人もあれば、ある方法に限界を感じて別の方法を学び始めると自分の問いも変わってきていることに気づいた、という人もあります。執筆者のみなさんが、自らの過去の論文を批判的に内省しつつ、この変容のプロセスを開示してくれたおかげで、私たちはそこから多くを学ぶことができます。つまり、何のテーマのもとにどんな質的研究をしたのかという結果を示す論文ではなく、その論文の作成プロセスを開陳するのが本書のねらいなのです。

本書は大きく3部構成になっています。第1部は、日本語教育において、質的研究が行われるようになった背景やそこでめざしていること、質的研究の理念について書かれた論考を集めました。とくに質的論文に対して抱かれる「客観的ではないのではないか」といった疑問に対して、いくつかの観点からディスカッションが行われています。それに対して、第2部「個をとらえる質的研究」および第3部「場をとらえる質的研究」は、執筆者たちのフィールドでの実践研究論文を集めました。とくに、論文化したものや研究発表したものについて、それを裏側から解題するようにして書かれています。そのことによって、執筆者の問題意識や工夫の意図をより深く理解することができます。「個をとらえる」「場をとらえる」といっても、実は「個」は「場」の中に埋め込まれ影響を受けており、また「場」は「個」から成り立っているわけですから、そもそ

も「個」とか「場」と分けること自体が矛盾を内包しています。しかし、あえて書き手がどこに注目しているかで分けてみました。したがって、読者のみなさまは、どこから読み始めてくださってもけっこうです。

第1部「日本語教育における質的研究—今、なぜ質的研究なのか」は5つの概論的、理論的な章からなります。第1章（館岡論文）では、なぜ今質的研究なのか、その背景が述べられ、日本語教育学が学として自律的な分野であるためには、日本語教育のフィールドの理論を打ち立てるための実践研究が必要であり、そのために質的研究が重要な役割を果たすことが主張されます。第2章（八木論文）では、質的研究におけるパラダイム、研究方法、調査方法の関係がわかりやすく説明されます。さらに、質的研究における「良い研究」とはどのようなものか、妥当性をめぐる議論を検討したうえで、最終的に具体的なガイドラインとしてチェックリストが示されます。第3章（広瀬論文）では、「実践研究」との関係から質的研究を考察し、「実践研究者の視点」が研究に生かされるべきであることが主張されます。言語観、教育観、研究観そのものの問い直しからスタートせずに、単に質的研究を新たな方法論として扱うことへの警鐘を鳴らします。第4章（市嶋論文）は、日本語教育で広くおこなわれている実践者（教師）自身による「実践研究」をとりあげ、そこに内在する当事者性の問題をテーマとしています。ここで筆者は、学習者を研究の対象者ではなく「共在者」としてとらえることの可能性を示します。第5章（三代論文）では、学習者たちの語り＝声を聴くということはどういうことかを自身のライフストーリー研究から検討します。そのうえで、ライフストーリー研究をするということは、多様な「声」に気づき、その意味を研究者＝実践者として問い直し、実践研究を志向／補完すべきであることが主張されます。

第2部「個をとらえる質的研究」は個に光を当てた事例を中心とした6つの章からなります。第6章（佐藤論文）では、元留学生のライフストーリーを聞いた日本語教師である筆者がインタビューをあらためて読み直すことを通して、聞き手と語り手の関係性の中でストーリーが共構築されていたこと、また構えによって反ストーリーの語りを見えにくくしてしまうことが指摘されます。筆者は、日本語教師としてライフストーリーを聴くことの「応答責任」を主張します。第7章（鄭論文）では、日本語学習者の人生とともに続いている「日本語人生」を一人ひとり記述し、ライフヒストリーとして書き上げ、その「日本語人生」に働きかけていく日本語教育のあり方が検討されます。その際、人間が人間を研究するという立場で、筆者はライフにかかわる研究は誰にでもできるが、誰でもできるわけではないと述べています。第8章（太田論文）では、ある一人の子どもに対する3つの視点——子どもへの学習支援の実践者の視点、子どもの家族の視点、子ども自身の視点——からなる3つの質的研究をとおして、日本語学習支援実践の意味が探られます。その過程をとおして、筆者自身が子ども観、言語学習観を修正していったところに質的研究の意義があるといいます。第9章（尾関論文）では、日本語教育を必要とする子どもたちに向き合うさい、どのような方法で子どもたちの学びを捉えることができるのか、筆者自身の経験における試行錯誤のプロセスが書かれています。それは、方法の変化とそれに伴う子どもへの接し方の変化、その背景にある考え方の変化でもあったといいます。第10章（鈴木論文）では、「共生日本語教育」という理念のもとに行われた教育実習において、実習生の成長を迫うために「比喩生成課題」という方法が採用されました。そこでは、研究協力者の作成した比喩に込められた認識や信念、その変容を探究することで、協力者の内省に同行し、自身

も内省を繰り返すという挑戦が行われています。第11章（小澤・坪根論文）では、PAC分析（Personal Attitude Construct Analysis）という方法により、ある日本語教師の「いい日本語教師観」が探求されます。PAC分析の具体的なやり方の紹介とともに、筆者たちの経験から分析上の留意点が示されます。

第3部「場をとらえる質的研究」では、場に光を当てた事例を中心とした5つの章からなります。第12章（古屋・金・武論文）では、初級の「総合活動型日本語クラス」において、クラス内の相互行為をどのように記述するかが検討されます。これは、実践研究をストーリー化し、つまり、物語的に記述することによって、自分たちが行った教育実践を再構成しようという試みです。この行為を通して、筆者たちは教育実践の全体となっている枠組みが更新されていくことが、質的研究の意義であり醍醐味であると主張します。第13章（崔論文）では、教室という現場を読み解く質的研究方法として、観察法が採用されます。古屋・金・武論文では執筆者＝教育実践者でしたが、崔論文では、執筆者は自らを観察のツールとして、他の教育実践者の授業を観察し記録しています。観察法によって現場を読み解くことで明らかになったことを現場に還元していくことが研究の意義だといいます。第14章（野々口論文）では、地域日本語教室での「対話的問題提起学習」において、外国人と日本人が対話を通して他者とともに何をどのように考えていったかを分析した自身の論文について、その方法とまとめ方が具体的に説明されます。このプロセスを見せてくれることにより、筆者が何を見たくて、そのためにどんな工夫をしたのかがよくわかります。第15章（岩田論文）では、学習者のやり取りを記述する方法をめぐっての筆者の試行錯誤のプロセスが2つの論文とその後の教材作成のプロセスとして示されます。IR分析から会話分

析へとやり取りを分析する方法が変わり、さらにはそれを自分の専門である日本語教育にどう生かせばいいかという問題意識から会話分析の知見を生かした会話教材を作成するにいたったといいます。第16章(牛窪論文)では、学習者たちへのインタビューにもとづく筆者自身の実践研究から、日本語授業の前提を議論しようとしています。教師自身が実施する質的研究の意義は、日本語教育に携わる者としての立場を示しながら、現場に議論を起こしていくことにあると筆者は主張します。

尚、これら各章の論文は、独立のものです。執筆者たちそれぞれの立ち位置も異なりますし、使用している用語の統一も基本的には行っていません。

最後に、質的研究の文献案内をつけました。冒頭に述べたように、現在、多くの質的研究の著書が出版されていますが、基本的なもの、入門的なものを中心に紹介します。

ここに編まれた16篇の論文に、みなさんご自身との多くの「重なり」と「異なり」を発見するでしょう。フィールドや関心の対象は一見、異なっているようにみえるかもしれませんが。しかし、執筆者それぞれの問題意識や工夫のプロセスでは多くの共感を得るでしょう。また、同じような問題意識をもっている、問いの立て方が違っていたり、工夫の方向性が異なっていたりもするでしょう。このような重なりと異なりの発見の中で、自身の実践と研究を問い直していくことができるのではないかと思います。本書がそのような学びの場づくりの一翼を担うことができれば、望外の喜びです。

館岡洋子

1	第1部	
		日本語教育における質的研究
		今、なぜ質的研究なのか
3	第1章	日本語教育における質的研究の 可能性と挑戦 「日本語教育学」としての自律的な発展をめざして 館岡洋子
27	第2章	質的研究の認識論 言葉を使う人間とその世界を理解するために 八木真奈美
49	第3章	「実践研究」から考える質的研究の意義 言語観・教育観・研究観のズレを 可視化する議論のために 広瀬和佳子
71	第4章	実践者による「実践研究」に内在する 当事者性の問題 「共在者」としての教師と学習者への注目 市嶋典子
93	第5章	「声」を聴くということ 日本語教育学としてのライフストーリー研究から 三代純平

115	第2部	個をとらえる質的研究
117	第6章	なぜ私は学習者のライフストーリーを 聴き続けるのか 日本語教師として私の構えを記述することの意味 佐藤正則
139	第7章	語りから得られる方法から 人間のライフに関わる研究へ 「日本語人生」に出会うための物語より 鄭京姫
159	第8章	複数の当事者の視点から考える 日本語学習支援実践の意味 実践報告メール、子どもと家族が語る ライフストーリーの分析から 太田裕子
183	第9章	子どもたちの学びを捉える方法をめぐって わたしは子どもたちとどう向き合ってきたのか 尾関史
201	第10章	比喩に込められた認識や信念、 その変容を探究する 「共生日本語教育」をめぐる比喩生成課題と トライアンギュレーション 鈴木寿子
221	第11章	日本語を母語とする現職日本語教師Aの 「いい日本語教師観」 PAC分析を活用してわかること 小澤伊久美・坪根由香里

247	第3部	場をとらえる質的研究
249	第12章	日本語の教室をいかに描くか 初級「総合活動型クラス」における相互行為を 質的に記述する 古屋憲章・金龍男・武一美
273	第13章	教室という現場を読み解く 質的研究方法－観察法 授業中の「事件」への教師の対応と 教育観の具現を探る授業観察の事例 崔鉉弼
301	第14章	言語学習としての対話の分析 人が言語を使って何をどのように考えるかを見ること 野々口ちとせ
321	第15章	学習者のやり取りを記述する方法 会話分析を日本語教育に生かす試み 岩田夏穂
343	第16章	教師が自身の実践を分析する意味 日本語授業の前提を議論するために 牛窪隆太

- 369 質的研究 文献案内
ロマン パシユカ
- 379 おわりに
館岡洋子
- 380 索引
- 385 編者・執筆者紹介

第 1 部

日本語教育
における質的研究
今、なぜ質的研究なのか

日本語教育における 質的研究の可能性と挑戦

「日本語教育学」としての自律的な発展をめざして

館岡洋子

1 はじめに

近年、日本語教育において質的研究に注目が集まっています。日本語学習者や日本語教師の語りを聞いたり、教室でのやりとりを観察したりすることによって、人々のことばとのかかわりや学習・教育への理解を深めようという試みだといえるでしょう。

私自身を振り返ってみても、研究関心の変化につれて研究方法もずいぶん変わってきました。かつては日本語学習者の文章理解について、読後の要約文を数量データ化することで理解度を測定してきました（館岡 1996 ほか）。しかし、これでは一人ひとりの学習者がどのようにテキストに取り組み、何を問題としているか、文章理解のプロセスそのものが見えないため、次には読みのプロセスのプロトコル分析をするようになりました（館岡 1999, 2001, 2005 ほか）。これが私の質的研究の始まりといえますが、この時点ではあくまでもテキストをどのように情報処理しているかという視点であって、人間としての読み手の気持ちや取り組みの姿が見えず、また、クラスというコミュニティの中での読み手同士の相互作用も研究の射程に入れることができずにいました。現実の授業では、学習者一人ひとりのありようは動態的なもので、テキストに取り組み、テキストの書き手と対話をし、それについてクラスメイトと対話